牡丹（ボタン）

中国の北西部の原産で、花の豪華さから「百花の王」花王、「百花の神」花神と呼ばれ、特に唐時代には長安の春を祝祭する花として珍重された。ボタンは漢名の牡丹の音読みで、「丹」は赤を意味し「牡」は雄のことである。中国明代では赤いボタンが最高級であったが、ボタンの実生からは必ずしも同じ赤い花を咲かせるとは限らず、繁殖は株分けによっておこなわれたため、「子供のできない（すなわち雄）赤い花」ということでこの名がついたといわれている。古名は深見草（ふかみぐさ）、二十日草、富貴草という。

日本には、奈良時代の聖武天皇の頃に渡来し、島根県の大根島のボタンはこの時株分けされたボタンと伝えられている。平安時代には各地の寺院などで栽培され、江戸時代にはボタンは大流行し、シーボルトも日本のボタンをオランダに紹介したという。

牡丹散ってうちかさなりぬ二三片　　蕪村

白牡丹といふといへども紅ほのか　　虚子

牡丹色といわれる濃赤紫色をはじめ、赤、白、紫、黄と花色は豊富で、花形もいろいろある。佐賀県肥前町にある切木ボタンは樹齢三百年をこえる古木で、一株で根はつながって二百数十本に約六百の薄紅の花を咲かせ全国的に有名で、県の天然記念物に指定されている。

仏教が国教化する平安時代には、中国の想像上の動物である唐獅子が国家鎮護の象徴となり、武士好みの勇ましい唐獅子は旗印や兜の飾りにされた。「百獣の王」の獅子と「百花の王」の牡丹が組み合わされ襖絵や屏風絵の画題にされた。南画の世界では牡丹のことを「王堂富貴」という。

金屏のかくやくとしてぼたん哉　　蕪村

刺青（いれずみ）の流行した江戸時代には、トビ職や火消しが唐獅子牡丹の文様を体に刻み、この風俗が後に博徒などに受け継がれた。また牡丹と唐獅子は文殊菩薩の浄土に住む獅子が牡丹の花とたわむれる様子が豪快な舞と力強いはやしに表現されている能楽としても登場している。また富貴の象徴として文様にも家紋としても定着した、菊、葵に次ぐ権威ある紋章とされた。

「立てば芍薬、すわれば牡丹」といわれるように牡丹の美しさは妖麗な雰囲気を漂わせた婦人のすわる姿にたとえられている。生け花としては立ち姿美しく、すっきりいける芍薬に対して、牡丹は葉を多く使って花容をいかにも豊かな感じに、また一種類だけを品位うるわしく、花王としての徳を尊重するいけ方がいけばなのこつといわれている。茶花としては一月ごろから咲く寒牡丹の固いつぼみが特に賞美されている。寒牡丹は冬牡丹ともいい、冬日に花開くゆえ、花はややこぶりで葉はあまり伸びない。

ひう〳〵と風は空行く冬牡丹　　鬼貫

薬用部位は根皮で10月に採取し天日乾燥いて用いる。薬効としては消炎、解熱、鎮痛、浄血の作用があり、根皮（牡丹皮）6gを水400mlで煎じ1日2～3回に分けて温服する。桂枝茯苓丸、八味丸、犬黄牡丹皮湯など多くの漢方薬に配合されている。

漢名を牡丹皮といい、所謂「血の道」の薬として代表的に、使われている。

養正会薬局　（鍵山）

民間療法

からだを温め、貧血を防ぐ シソ酒

百薬の長ともいわれるお酒は、血行を盛んにしてからだを温め、疲れをとる効果があります。このお酒の効能に加えて、カロチン、ビタミンA、C、鉄分を豊富に含むシソが貧血防止に役立つため、シソ酒は、低血圧に効果的といわれています。

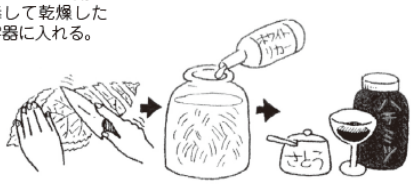
〈シソ酒の作り方〉

①赤シソ（青シソでもよい）は水洗いして水けをふき取り、ざく切りにする。

②ざく切りにした赤シソを熱湯消毒して乾燥した容器に入れる。

③赤シソの5倍のホワイトリカーを注ぎ、密閉して冷暗所で保存する。

④3か月したら熟成するので、一日1回か2回、杯に1～2杯、食前に飲む。好みで、ハチミツや砂糖を加えてもよい。



知っていますか？ おばあちゃんの知恵

ショウガは、料理のほかにいろいろの使い方がございます。

暑い時など、生のショウガをすって、紅茶にさして飲むと、汗が出て涼しく感じられます。またカゼのひき始めの時にも、同じようにして飲みますと、汗が出て熱が下がり、さわやかな気持ちになります。おなかがふくれ、胸がつかえ、吐き気があるような時に、小指の先ほどの生ショウガをすって、それに湯をさし、砂糖を少々加えて口当りよくしたものを湯飲み一杯飲むと、胸がスーッとして、ガスも出ておなかのふくれもなくなります。

薬剤師　高木　丈夫

こどもの病気シリーズ

滲出性中耳炎

入学、入園前の検査で、「滲出性中耳炎です。」と告げられ、びっくりされた経験のある方もいらっしゃるのではないでしょうか。滲出性中耳炎は、近年著しく増加している病気のひとつで、就学前の子どもの約8割が一度はかかると言われています。滲出性中耳炎とは、鼓膜の内側の内耳に、粘膜からの分泌液が滲み出てたまる病気。つまり、鼓膜の内側に水がたまった状態で、普通痛みや発熱は伴わないため気付かれずに放置されることが多いのです。

原因…子どもの耳管は大人よりも短くまっすぐなので、急性副鼻腔炎などにかかると滲出性中耳炎を合併しやすく、また、急性中耳炎にかかり、完治しないうちに治療をやめたため滲出性中耳炎に移行するケースもあります。鼻のアレルギーも原因になりやすいため、アレルギー体質の子どもは、アレルギー性鼻炎にかかっているかどうか早めに確かめ治療することが大切です。

症状・診断…耳がふさがれたような感じがして、聞こえが悪くなります。しかし子どもの場合は、症状に慣れてしまうのが早いため、かなり聞こえが悪くても自覚しないので、気付くのが遅れることが多いのです。早期発見のポイントは、★風邪が治っても鼻汁が治まらない★話しかけると聞き返すことが多くなる★テレビの音を大きくするか、近付いてみる、などです。

鼓膜を見ると中に液体がたまっているのがわかります。聴力検査では、軽度から中程度の伝音性難聴が認められ、ティンパノメトリーという検査では、鼓膜の動きが制限された波型が見られます。滲出性中耳炎を放置しておいても自然に治る場合もありますが、鼓膜が奥に癒着して、聞こえが悪くなったり、骨を壊す真珠腫性中耳炎になり、聴力が回復しないこともありますので、早期発見、早期治療をおすすめします。

治療…まず、原因となる副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎があれば、それらを治療します。通院時に、鼻汁を取り除いて、抗生物質や炎症を和らげる薬を服用します。一ヶ月ほどで完治し、聴力も回復しますが、治りが悪い場合は、鼓膜を切開して、浸出液を吸引除去します。鼓膜は再生力が強いので、普通は切開してから1～4週間以内には完全にふさがり、後に障害を残すことはありません。鼓膜切開を何回か行っても治らないときには、鼓膜に小さな穴をあけてチューブを挿入し、内耳腔を換気する方法をとることもあります。

予防…風邪などの時、鼻汁を丹念に取り除くことが予防につながります。片方の小鼻を押さえ、深く息を吸って、口を閉じ、「フンと言ってごらん」と教えるとうまくできます。ただし、鼻汁に粘りがあるときや鼻の奥にたまっているときに強くかむと、急性中耳炎を起こす怖れもあるので、注意が必要です。鼻を1人でかめない子どもは、大人が頻繁にかんでやり、かめる子どもには、片方ずつきちんとかむことを教えて下さい。

養正会薬局　薬剤部